竹

松雨
鶴翠 合著

さゝ舟

小關松雨
井上鶴翠
共著

さゝ舟

小關松雨
井上鶴翠
共著

さゝ舟序

講學の要は、道を求め、德を修め、以て世を利し、民を益するにあり。古への聖賢之れを實踐躬行し、教を後世に垂るる所以のもの、咸然らざるは無し。近世歐米の學風は、稍趣を異にする觀ありと雖も、要するに、亦世を濟ひ、民を利して、社會の進運に貢献するを以て、究竟の目的とするに外ならざるなり。然らば則、道に志し、學を修むる士は、孜々として、此目的に向ひて進み、汲々として、世道人心に裨益せんことを勉め、寸時も實學の研鑽を怠るべからず。夫の徒らに詞章の末技を弄する如きは、君子の與せざる所なり。然りと雖

も、口唯道德を談じ、心專ら實學に勞する時は、其人動もすれば器局狹小となり、餘裕に乏しく、雅懷を缺くに至り、世人の笑へるを見ては、不平を鳴らし、悲めるを見ても、同情を寄する能はざる底の、自我的觀念に富む、道學先生と成り了する弊なしとせざるなり。嗟吁古人が、偏せず固せずと敎へ、道を講ずると共に、藝に遊ばんことを奬め、實踐實學を尙ぶと雖も、又詩歌の學ばざるべからざるを談じ、思邪無しと、此を讃ずるもの、其用意周到なりと謂ふべし。是故に、利用厚生の實學を捨てて詞華言葉の末にのみ耽るべからざるも、實踐實學と相俟ちて、詩を學び、藝に遊ぶ嗜好あるは、人の天眞を發揮し、器宇を濶大にし、無邪忘我の妙境に逍遙せしむる益無くんば

あらず、やがて是世運の進歩に貢獻する所以に外ならざるなり。井上謙治、小關貞治の二子は本縣師範學校生徒にして、講學に熱心なる秀才なり。且平素佛陀の慈光に浴して、堅固なる信仰を把持する遺弟なり。余職を山形中學校に奉じて、此地に來るや。幾くもなくして、余が寓を訪ひ、信仰談を聽かんことを求めらる。爾來一年有半、每週共に佛陀慈愛の清泉を汲み、道交日に厚きを加ふ。頃日二子一小冊子を携へ來りて曰く、之れ生等が講學の餘暇に吟詠せる詩歌なり、今玆小關子業を卒へ、校を辭せんとするに當り、合して一本と成し、梓に上せんと欲す、願くば先生之れに序せよと。余は夙に二子が篤學にして、求道に熱心なるを敬重する者なり。

今又此佳什を見るに及んで、益二子の爲人を欽し、蕪文を顧みず、一言を述べて、序に代ふ。

明治三十八年一月二十日

霞城の寓居に於て之を識す

本多辰次郎

笹舟に題す

松雨鶴翠の二君、頗趣味に富む。正課研學の餘、敷嶋の道に入りて、最新派の風調を得たり。その錦心繡腸を織り成せるは、即ちこれ此の笹舟の一卷。

余駑鈍、風流の技に乏しく、鶯歌鹿鳴、聞いて情をうつすを知らず、何爲ぞ敢て二君の金聲玉振を品隲すといはんや。たゞ私に謂へらく、鶴翠の歌や、春の花園に胡蝶の舞ふが如く、松雨の詠や、秋の高嶺に孤月の懸るに似たりと。その溫、その優、その涙多くして情に堪へざるもの、これ春、これ花、これはかなげなる胡蝶の化身にあらず

や。その清、その高、その血凝りて世を憤る所、これ秋、これ山、これ涼しげなる孤月の風情にあらずや。松雨に幽玄怪奇の作多く、鶴翠のともすれば平凡に流れんとする、又これ長所に伴ふ短所とみるべきもの。』

然れども、鶴翠に血なく、松雨に涙なしといふにあらず。蓋、松雨やその人とその境遇と、餘りに涙多きに過ぐ。此の故に、一轉して殆ど塵寰を脱せんと欲し、鶴翠や、その性とその脚地と、能く血の躍る、を抑ふるに堪ふ。ここを以て、敢て人生を蔑するを好まず。若夫、地をかへば、鶴翠の松雨となり、松雨の鶴翠となる、亦未知るべからざる也。』

余此の一卷に於て、春秋併せ樂み、血涙共に涌き、人世と超世と兩ながら觀じ得るを喜ぶ。梓成るに及び、二君來りて、序を需む。乃ち見る所を叙すること斯の如し。

旅順陷落の月の二十日

齋藤鍋藏

序

若き歌人、松雨、鶴翠、この頃そのあらはす所の、さゝ舟をわざ〳〵おくりければ、うれしくてひと夜、讀みてゆくに、數ある歌、いづれも溫籍にして幽艶也。或は花にねむる春の月をみる如きもの、或は紅楓夕陽に映するが如きもの、彩華爛然、紙上に躍如として無限の聲韻あり。

花いろ〳〵いづら梅やら櫻やら

中郡の里にて

小川清軒

序

あわれ等が胸には、青春の焔の、いかに、すさまじきよ。藻の花に、さくやく水の流れを、戀と思ひ、淋びしく咲ける野の花を、色あせし少女の姿ともみる、見るとし聞くとし纒々。みな哀詩たらざるはなし。されど、このささ舟のひと卷は、いと小さき想の、影の影也。もし幼子の。笑ひ狂ずるさまを、愛らしと見給はん人あらば。」

歌に醉ひてあみしひと卷神にささげ
この新春のほこりとなさん

松雨
鶴翠

紅欄

松雨

窓あけて機織をとめ唄をかし築牆ひ
くゝ桃咲ける家

夕月のほのめき出でゝ川沿ひの梅の
小村は繪によく似たり

薄絹につゝみしごとき春の夜を古城
のほとり騎馬の人みゆ

歌よみて山蔭庵に花守れば長閑にく
るゝ春雨の空

篝たく衛士のさゞめき音たゝて櫻を
もるゝ月傾きぬ

舳に立ちて川上遠く見返へれば春の
日うすし故郷の山

あたゝかき眞晝の空は薄曇桃の小村
はうぐひすの聲

酒買ひて戻る伏見の菜花路なばなの
末に夕月のぼる

詩の國にたゞふさはしき曙と歌よみ
居れば初日出でにけり

小提灯をかた手にいそぐ傘の人祇園
の櫻雨にちる夕

さびしさの心まどひか裏戸しのぶ人
のけはひす春雨の宵

小櫻の折々ちれる池殿に琴の音たに
ぬ月はのぼりぬ

朧夜の花たゞ白き紅欄に思ふ人なく
鐘ふけてゆく

雛鶴の池の面ちかくねむるあたり庭
の日永を山吹の散る

ともぐに菫摘みにし人はあらず岡の館は夕づゝさむき

鸚鵡やみて秘歌うたふ友ぞなき寂びしき庵よ桃の花ちる

湖沿ひの柳の小村雨となりぬ燈火みゆる夕ぐれのころ

朝晴を青柳なびく窻によりて鴨なく湖の白帆かぞへみる

白拍子院にめされて行く宵を加茂の夜櫻月になりゆく

薄氷そとうちくだく手柄杓に軒の寒梅ひとひら散りぬ

病む妹をきぬに蔽ひて花ふゞく月の
湖舟にしてゆく

狗の兒を抱きて眠むれる幼子が莚の
上に桃の花ちる

ひと村の平和(やはらぎ)みちし新春や皇軍(みいくさ)祝ふ
旗ひるがへる

星の光

星の光のきよければ
戀の面かげやどるべし
かくて少女はほゝ笑まむ
紫の葩(はな)手にもちて

愛とまことの耀きに
星の光よまどかなれ

さびしき人の宵々を
たゞよふ雲のくろければ

別れ

あふは別るゝはじめぞと
あはれ誰が世に始まりし
生木をさきてほゝ笑むは
神のわざにもあるまじを

花車

北山のふもとに霞たなびきて墨繪に
似たる京の寺でら
夕告ぐる鐘のひびきに春は老いて風
なき空に櫻また散る

思ひ多き春の一夜をあくがれて琴に
ひかるる青柳のかど

春雨に若葉若草もえいでて野邊もや
まべも緑になりぬ

萠えいづる野邊のわか草若き人のた
かきおもひによく似たらずや

くだちゆく春の雨夜をいねがてにを
さな語りの乳母をしぞ思ふ

雲雀うたふ野邊の芝生に友とふたり
歌に興せし春をしぞ思ふ

ありあけの月ほのじろき梅のやど訪
ひよる翁髯ましろなり

うぐひすは園の紅梅に今日もきて歌
ふをあはれ吾れに歌なき

亡き妹が遺愛(かたみ)の詩集手にとりてつく
づく思ふさくらさくころ

青柳に夕月ふかく懸るあたり牛にの
りゆく牧童ひとり

月が瀬のゆかしき梅の香に酔ひて歌
といふ歌みなかぐはしき

渡しまつ舟のしばしを桃の花こころ
ありげにちるよひらひら

しめやかに春の雨ふる夕ぐれを泣く
か乙女の窓に凭る見ゆ

山寺に椿ひろうてゆく乙女夕日背に
して花籠を手に

おばしまに夕べさびしくものを思ふ乙
女の顔に散る櫻かな

ともすれば憂ひに沈む黒髪のやせた
る頬にちるやしら桃

春の歌

翠の翅うちひろげ
梅の花影うぐひすの
飛び傳ひつつついと妙に
謳ふか哀れ春の歌

かげろふもゆる春の野邊
黄金色なす菜の花の

香にやよひたるひらひらと
舞ひて遊べる胡蝶かな

帶のくれない野のみどり
ながめ美し少女子の
菫摘みつつ謳ふなる
聲のどかなり春の風
みどり色濃き柳の糸

花と花とを縫ひ連ぬ
ア、佐保姫の宿ります
都ぞ春の錦かな

紫匂ふ藤の花
池にその影宿せるを
吹き來る風よ心して
漣起すこと勿れ

※　※　※

樂しき春は過ぎ易く
若き命は老い易し
君よ一日を憂ひなく
春の野山に遊ばずや

紫の雲

松雨

紫の雲富士が嶺にたゞよひて相摸の
海に初日出でにけり

春しらす春の女神の秘言かそよとく
づるる緋牡丹の花

山畑に鳩群なきて川岸の緋桃林に日はうすれゆく

梅寒き谿の流を舟にのりて下りても見き月ヶ瀬の里

薄月夜友がり行けば友はあらず小暗き池に家鴨なくなる

藤の花折々ちれる山蔭の小さき湖畫しづかなり

亡き妹が花摘みしたる築山の花菰の上を春雨のふる

坂になりて梅咲く寺は見わずなりぬ淋びしくあるよ夕暮の鐘

馬子唄は川下とほくうすれゆきて菜
花の末に夕月いでぬ

舟繋く柳堤は雨となりぬ淺草寺はゆ
ふぐれのかね

山寺に撞木とる身のいつか老いて繰
言おほき春の宵かな

藤波のかげにはらからむつましき稚
兒髷お垂げの美しきふたり

美しき燈ともしゝ桃の宿小さきまと
ゐに月更けてゆく

川添ひの春の夕べのさびしさよ水を
かすむる菩提寺の鐘

一軍は枚を銜みて渉りゆきぬ朧月夜
の宇治の河浪

傘さして花の雨ふる御室道狩衣の人
いづちへかゆきし

牡丹のくづれし花をひろひとりて花
環つくれるうつくしの人

小笠懸に駒をはしらす公達が萠黄の
袖に花ちりかゝる

柳くらき小窓によりて君と語るしの
びの袖に花ちりかゝる

春の夜を歌にふかしぬ梅の庵あるじ
の翁茶にたくみなり

美しき春はめぐりて詩の國の花は咲
きたり君が御歌に
仰ぎてはたゞしたひよる聖堂のマリ
ヤの御像月ほのじろき

落花怨

緑たゝふる里川の
岸の櫻の色あせて
夕べさびしく笑めるとき
夢より淡き月影に
やつれし面わてらさせて
ふたりとげ得ぬ戀になく

※　※　※

悲しからずや花瓣の
ちぎれる枝をはなれては
風もあらぬにはら〳〵と

梧窓

秋風は庭の梧桐におとづれて病みま
す母のゑまひ淋しき

ともすれば憂ひに沈むこの秋や夕べ
の鐘はことさらつらき

さびしさを慰めかねて今日もまた秋
のあはれにひとり泣くかな

ただひとり燈火暗き文机に故郷おも
ふ袖時雨かな

秋の日は葦の枯葉に傾きてさわたる
風の肌うす寒き

故郷の母はいかにとしのぶれば時雨

るる空に雁なきわたる

友とふたりむかし語りに興ふけて秋

の雨夜をそぞろふかしぬ

野にたちて愁ひに走る秋の雲に歌お

もふらし若き牧人

これやわが秋の思ひを流しゆく神の
さとしか野のいささ川

秋風を庭の梧桐にきき知りてこのごろ病ひまたおもりゆく

琴の師のはぎの花ちるかごによりて
山の端のぼる月を見るかな

うるはしき君がなさけのこもるやと
あした花野のつゆふみわくる

萩の花ちりてさびしき中庭のつめたき石に秋の雨ふる

歌もなく詩もなく君と別れけり虫ときしきる月の野道に

秋草の花うるはしき窓によりて書筆
手にせる乙女うつくし

このゆふべ小萩の花をかめにいけて
君待ちわぶる歌もなき夜や

故郷をいでてなぬかの旅やかた淋し
くきくや芭蕉葉の雨

嵯峨わたり三五の月に夜はふけて昔
ながらの松風の聲

眺めやる夕空雨とふりいでてひびく
野寺の鐘重う聞ゆ

川瀬下る稻舟影はうすれ行きて最上
の廣野雨に暮れ行く

夕ぐれにしばしと憩ふ野の石のうへ
にみだれて萩の花咲く

ひとまきの詩集手にして歌おもふ月
の花園鈴虫のこゑ

友とふたり秋の月夜を舟にして空ゆ
く雁に歌をしぞ思ふ

秋の思

日脚みじかき秋の日や
暮れゆくけふの名殘とて
長くかすかにまた遠く
ひびく夕べの鐘の音は
ささらつらきわが思
ふりさけ見れば青山も

色はもみぢに染めかへて
あしたゆふべにはらはらと
吹きおとづる秋風は
いとどかなしきわが心

思ひあまりてかなしくも
なぐさめかぬる夕まぐれ
庭の梧桐にしとしと
さみしくそそぐあきさめは

ひとりさびしきわが涙

庭におりたちただひとり
花ちりかかる萩を分け
空ながむれば行く雲の
行くへのままに流さなむ
いといとつらきこの思

春の日を秋の月夜を君と二人
女神の雨手執りて遊ばな

神の涙

ほろほろと零れて落つる夕露は神の
涙か白百合の花
椰子の樹のかげにほのめく弦月のか
かれるあたり金字塔の影

乳母が家は清水に名ありいで行かん

まして聖旨の百合咲ける道

夕潮をたゝへて浮ぶ宮嶋の月あかき

夜を舟にしてゆく

燈火の油とぼしき山宿に日記かき居

れば啼くほとゝぎす

二十日あまり五日の月はかたぶきて

五位鷺のなく水神の森

甲板にわかきふたりの影きえて杜鵑

なくあけがたの空

三井寺の夕べの鐘は重うひゞくほと

とぎす啼く五月雨の湖

朝ぼらけ縹にあけし湖の蘆間はなれ
てしら鷺のとぶ

草繁き清水のほとり白百合のひとも
と咲きてひる静かなり

由駕籠にゆられ心地の坂道やゆめさ
ながらの湖ながめやる

夕月のあわくかゝれる杉の森の墓塲
のあたりほとゝぎす鳴く

夏草の生ひ茂りたる山寺の庭のおち
こち白百合の咲く

反故あれば悶えおほしと爐に焚きて
ほゝ笑むゆふべ子規なく

水車ゆるくめぐれる日の盛り椰子の
木蔭の流しづかなり

金色の入日うするゝ西の海や唐(から)の嶋
山ゆめかとぞ見る

水海に刀しづめて歸る夕べ鈴ヶ森あ
たりほとゝぎす啼く

くろく泛ぶ古城のあたり三日月の上
れば沖の波たかうなる

ねころびて畫の月みる草山の見返り
松にほとゝぎす啼く

うらぶれて山家に蚊遣たく人の破れ
し窓に夏の月みる

百合の香のそゞろにせまる夕暮や羊
逐ひゆく森かげの路

湯の神が靈の温泉の瀧あびて臥床に
入れば月はのぼりぬ

清き詩となり

清き詩となり戀となり
春野をかざる菫草
紫色は戀のいろ
ましろき色は歌のいろ

戀しりそめし乙女子が
あつき唇ふるゝとき
菫はきよき香をはきて

戀とうたとを囁かん

楠の香ゆらぐ

楠の香ゆらぐ森蔭に
愁ひもつ子よ立ちますな
すだま悲しき聲あげて
汝れを襲はんたゞ闇に

片破月

そぞろにも母のみすがた偲ばるる今
宵二十日の片破の月
高く低くきぬたうつ音のきこゆなり
月さゑわたる山科のさと

この三とせさびしくわれは思ふかな
君待ち詫ぶるふるさとの月

ふるさとのみ寺の池は苔ふりて昔な
がらに咲く杜若かな

床にありてふかき思ひに沈みゆくゆ
ふべなさけの君またとひぬ

今宵こは悲しき月夜母君のいまさば
なごとひとり泣くかな

利根川を下る夜舟に灯の見わて川面
細く五月雨のふる

若葉もる窓に嶋田の影淡し今宵も一
人歌かくらんか

美しう雨にぬれたる海棠に夕日あか
あかさすうつくしき

雨の夜を詩人みたり歌詠むと默思の
ひまを啼く杜鵑

この夏も聞きつ山奥わけ入りて春に
おくれし鶯のこゑ

詩に倦みてひとり逍遙ふ築山の茂み
が中にきくほととぎす

わが思ひみだるる宵をほととぎす雲
は裂けよの音となき渡る

雨はれぬゆくひと消ぬ夕ぐれの磯
の松原ほととぎすなく

杜鵑ひとこゑなきぬ有明に松の露光
る山科の庵

岩かげにわかき繪たくみ今日もきて
夕日に榮ゆる海うつしをる

ただひとり泣くか今宵の寂しみにあ
はれこの身は戀に痩せし身

嶋山の松に夕日の影落ちてさびしく
ひびく磯寺の鐘

吾妹子に窓あけさせて母上と炬燵に
けさの雪を見るかな

初雪のふり積りたる庭のたもに小さ
く優しき犬の足跡

この秋にささげん歌もなきまでに血
は冷えにけり詩は枯れにけり

なさけふかき君を知りてはここ三と
せなほいくとせを君にすがらむ

（松雨の君に）

夢想戀

ひとり思ひにかきくれて
小川のほとり逍遙へば
ゆかしき戀になぞらへて
かをりをおくる花薔薇
わが戀人にあひしごと
しばしは笑みぬ夢にして

ひとり思ひにかきくれて
森のこかげをさまよへば
こずゑの鳥は歌ふなり
「嘆き給ふなしか、君よ
つらき思ひをわれはいま
汝が戀人に告ぐべしと」

ひとり思ひにかきくれて
ゆふべの空をながむれば

見るめまばゆくあかねいろ
染めなされたる夕雲は
まだうら若きをとめ子の
もゆる血汐に似たるかな

ひとり思ひにかきくれて
しづけき宵の淋しさに
おほ空高く眺むれば
あづまの方にきらめける

涼しく清きおほ星は
すゑたのみある戀のごと

詩箋

松雨

詩箋まきてしぼしを闇の椽に立てば
庭の芭蕉に雨さびれゆく

みこと受けて三年歌あみ籠居る蘆の
まろやに秋の雨ふる

地にうすき我影さても夢に似たり虫

にさびゆく草山月夜

燈籠の夜露にしめる寺の廊みたま祭

りの夜はたゞ更けぬ

江の水の西に落ちゆく蘆原やゆふべ

矢走は秋の雨ふる

紙燭もちて萩の折戸にたゞずめる我

妹おもへばたゞがたきかな

古郷に病ひしらする筆とれば破れし

かべに虫なきいでぬ

棒木に鴉なきしきり川べりの菊の圃(はたけ)

に夕日てりすく

灯をきりて歌合せみぬ友とふたり庭
は芙蓉の月うすき宵

御佛をきざむ手おきてともし剪れば
庭の芭蕉に雨さびる音

野にゆきし歌人こよひ歸りこず芒野
一里月ふけてゆく

雨細うくれゆくゆく庵ひとはあらず
破れし戸口に虫なきしきる

利根川の岸の蘆原ゆふ日あかく筑波
峰あたりむらさきの雲

うす月夜雁なきわたる大河の堤にた
てる人のかげあり

秋の水の蘆間をくゞる荒澤や鴫なく

森は夕日うすれぬ

八束穂の垂穂は重き千町田に秋の日

たかく村雀とぶ

枯木立をりをり見ゆる吹雪野を獵人

ひとり銃になひゆく

御陵のひともと松に鴫なきて夕べさ

びしく秋の雨ふる

二つ三つ浮べる舟に夕日さして枯れ

し葦原葦切のなく

うつらうつら鷄の聲きく山が家の東

雲ごろを雪ふりいでぬ

旅僧のひとり過ぎたる松原に夕霧こめて時雨ふるなり

袞龍の御衣ぬぎて民をおもふやかた更けゆきたゞ雪の聲

ふゞき吹く曠野を北へかけてゆく騎兵五六騎とぶにもにたり

逆襲のあだの叫びの微かなり北沙河あたり有明のころ

やぶられし艦の沈める海原に三日月細う夜はふけわたる

定州の春の山々たそがれていづちともなく砲の音する

みどり兒に乳房ふくませうつゝなう
夫思ひ居れば啼く子規

埋火に國のふみ見る夜は更けて雪ふ
りいでぬ滿洲の原

ちる柳

さびしからすや秋のくれ
湖畔にひとりたゞずめば
風のまにまにちる柳
ふたひらみひらもの憂げに
まうて落ちたり水の面
かなしからずやちる柳

たとはゞ愁ひもつひとの
思にふける面のごと
水にまかれてひたされて
やがてしづかに沈みゆく

戀の若子

鶴翠

藻の花にふたりが戀を遂げし夢かく
と告げんになに耻づかしき
戀になやむ夢破られて高樓の寐覺の
床にあけの鐘きく

君とわが胸のおもひをはらさんにま
だ耻づかしきをさな心や

さらば君たほ空翔るゆふ雲の行くへ
のままに愁ひ流さむ

黒髪の亂れし胸のとどろきに夕べ野
寺の鐘をきざみぬ

なつかしき友ははるばる尋ねきて十
年の昔ゑみ物語る

ぼうたんの白きは聖(きよ)き戀のごとあか
きは血汐もゆるに似たり

瀧壺のおどるそこひに若き人の悶え
より醒めし靈あるが如し

藻の花のさかりなる江に舟うけて花
の薫りにひとり醉ふかな

散る花をのせていづちへ春の水はか
なき戀よ我が運命よ

思出多きわれ笹舟に身をよせて運命
の浪にゆられ見し夢

わが袖にふれてこぼれし緋牡丹の紅
きに似たる人の運命よ

似たらずや人の運命は散る花の花の
ゆくへによく似たらずや

しら浪のよせてはかへる荒磯にわれ
ただひとりもの思ふかな

池澱に琴奏でます姫君のまなざしゆ
かし振り袖すがた

繪たくみに今日この頃の胸の思ひ書
にせられなばわれ耻づかしき

その昔聖すみけん北山の里はいつし
か秋ふけにけり

國の爲め兄弟ふたり戟とりて八十路
の母の床にさびしき

兵一人ふたたりちらほら目に入りて
露營の陣屋月落ちんとす

利にくるひ譽に迷ふ世の人は詩の何
たるを知るや知らずや

うらめしう劍によりて立つ國に歌を
呼ばんは人あやまれり
遠つ祖の功績の劍手にとりて城の櫓
に初日迎へぬ

君を思ふ

胸の血汐の湧きて來て
床には就けど眠られず
ただ眼のまへに見ゆるかな
戀しき人のその姿

胸のいたみにえたへじと
君が家あたりさまよひて

銀杏のかげにただずめば
君こばしりによりて來ぬ

手に手を取りてそのときよ
清くゆかしく麗はしく
君とこころに語りしは
花にも似たる戀なりし

われは思ひぬその戀を

いつはりならぬ戀なりと
とはにゆかしく麗はしく
清くと神にいのりしを

君とわかれしその日より
おもはぬ時こそなかりけり
みどり色濃き君が眼を
白くやさしき君が手を

いまはいづこにいかにして
わが戀人はいますらむ
思へばはかなきわが契り
水の泡にも似たるかな

青瑠璃

松雨

青瑠璃の光とはゆる大森の青葉のゆ
めを吹くよ朝風

白樫の森を斜めに西へとべる星のひ
とつは紫なりし

若草にわかき想ひのあふれぬるあふ
るゝまゝに歌とならばや

涙なきををゝしといふや憂ひなきを
幸としいふや世すてし我を

秋姫が彩の裳裾をさとふれしあした
野に咲く花の八千草

默禱の朝戸あくれればあなたふと仰ぐ
富士が嶺あさ日いでたり

聖堂の夕べの鐘のひゞきくれば罪の
かうべのおのづから垂る

美しき愛の小星の天降りては咲きけ
んものか野の菫草

白菊にたかき思ひの偲ばれてこぼれし露に繪の具ときみぬ

再びはかへり來らん君ならずひと夜を泣かん御柩のまへ（友齋藤寶林君の失せし夜）

ひやゝかに冬の思ひを浮べては咲きけんものか水仙の花

つくづくと我ゆく末を思へみればたゞよふ雲の行方に似たり

木犀の香りゆかしき草堂や歌によろしきこのごろの秋

秋は花にふさはぬときとくな君蘭は清き花けがれなき花

あはれみの聲なつかしみなつかしみ
よれば寂びしうたゞ冥（ねむ）ります
（父君のうせ給ひし夜に）

寂びしみとかなしみありて人の世に
笑み高うなる詩は光りぬる

うつくしき葉守の神のさゝやきに眞
晝夏野はゆめまどかなり

エンゼルが白き翼につゝまれてねむ
らばいでん大なる歌

春の神が花にゆるさぬさみどりの青
葉の色よ五月雨の空

秋の神が血にそまるべき末ながらた
ゞうつくしき若草の雨

はかなきは春の花なり迷ひなり小さ
きほこりに微笑むなかれ

血は冷えぬわかき思ひはくづをれぬ
かくて此の世にさすらはん身か

ふと花に美し春の戀なりて胸なる琴
の弦なりやまず

君信仰の

君信仰の玉鞭あげて
如來の靈をときまさば
さびしきかほに微笑まむ
うれひにしつむ罪の子は

罪を怖れて

罪を怖れて靈光り
懺悔起りて人聖し

神の苔のつよくともしばしはたへよ罪のひと

詐りおほき

詐りおほき世を辭して
若き歌人野にいでよ
道のへに咲く花にさへ
清き神意はこもれるを

牧笛

牧童の羊呼ぶ笛ゆふぐれの彩うるはしき雲にひびきぬ
山寺に碁をうちをれば奥庭の梅にきて啼く鶯のこゑ

こぞの春君とうたひし月が瀬の梅の
薫りをおくる春風

若草の牧場にねぶる牛の背に二ひら
三ひら桃の花ちる

手折らんと梅のしづくに寄る人のむ
らごの袖に花散りかかる

大井川掉さし行けば花吹雪夕日の空
に亂るるあはれ

入相に草笛遠く聞ゆなり菜畑一里川
添ひの道

おばしまにもたれて笑める人若し月
は若葉の梢もる宵

旅なればことさら淋し春の雨ゆふべ
小窓にふるさと偲ぶ

聖き香や君は野に咲く白百合の白き
に似たる神の子のごと

遠く世をはなれて嵯峨の詫び住ひた
だおとづるは松風のこゑ

その昔世をはなれたる詫び人の住み
たる庵か虫なきしきる

歌によき繪によきよべの戀の夢われ
筆そめむに何をはばかる

鶯にさそはれつつもしらずしらず梅
咲く里に今日も暮しぬ

清かりし二世の契りを思ひいでて秋
の月夜をぬらす袖かな

ゆふ月のかげほのじろき春の沼笛ふ
きめぐる人なつかしき

かすむ野のあなたこなたに菫つむ少
女の髪に春の風吹く

青春夢

春や夢　愁ひぞのこる

※　※　※

思ひで多き　怨みぞ多き
若き運命　若き戀
散りて往にしか　落花のごとく
あなあはれ　はかなしや

浮世の契り

ああ夢なりや

ましろにきよく
やさしきかひな
なさけをそへし
もゆるくちびる
つきせぬあいを
こめたるひとみ

ああいまいづこ

月照るゆふべ　手をとりかはし
契りしは　君とわが
たかき想ひぞ　まことの戀ぞ
水のごと　流れしか
さてしも薄き　契りなりしよ

かたみとのこる

はなよりきよき
きみがおもかげ
いまはみるだに
なみだのたねぞ
あはかなしや
うきよのちぎり

※　※　※

春や夢

想ひぞのこる

天壇

松雨

天壇のともしび消えしこの夜ごろ闇
に光れる小さき小さき星
うら若き繪工けふも磯にたちて夕榮
くしき雲ながめ居る

はかなきは春の花なりまよひなりふ
れんに闇の裳裾手によき

秋姫が戀になさけに血を浴びて美し
霊はかれん運命か

若き人の榮えの御霊の消ゆる如く夕
かぎろひの虹うすれたり

白銀の楯野になげて月の大神秋の王
者とひとりほゝ笑む

琵琶だきて歌とく法師眉わかし木犀
香る草堂の秋

血に榮ゆる戰の大野忌しといふなか
くてぞいでん大なる平和

小さう澄める月も凍るかこの夜ごろ
靜寂(しゞま)の冬はたゞ冷やけき

寂びしみに堪へぬ夕べの鐘のひゞき
暗はひしひし身に迫り來る

悔いて身を神の苦に百打たせ千打た
せかくて靈(たま)たふとかる

青蘆のさゝやぎ歌のさゝぎやにまぎ
れ入らんの夕野笹笛

八の子が愁ひのきはみほゝ笑みのき
はみぞやがて詩の領となる

美しき秋姫堂のこもり居に聲によき
子と鈴虫うみぬ

薄月夜湯瀧のけむりもやとなりて御
師のゆめに御佛降りむ（入浴の僧正を送りて）

しめやかに昔を偲ぶ京の雨火影おも
たき白萩小窓

夕月の光しづかにあふれては甦り咲
く野の月見草

ともすれば愁にしづむ少女なるに戀
になけよと敎ふるか君

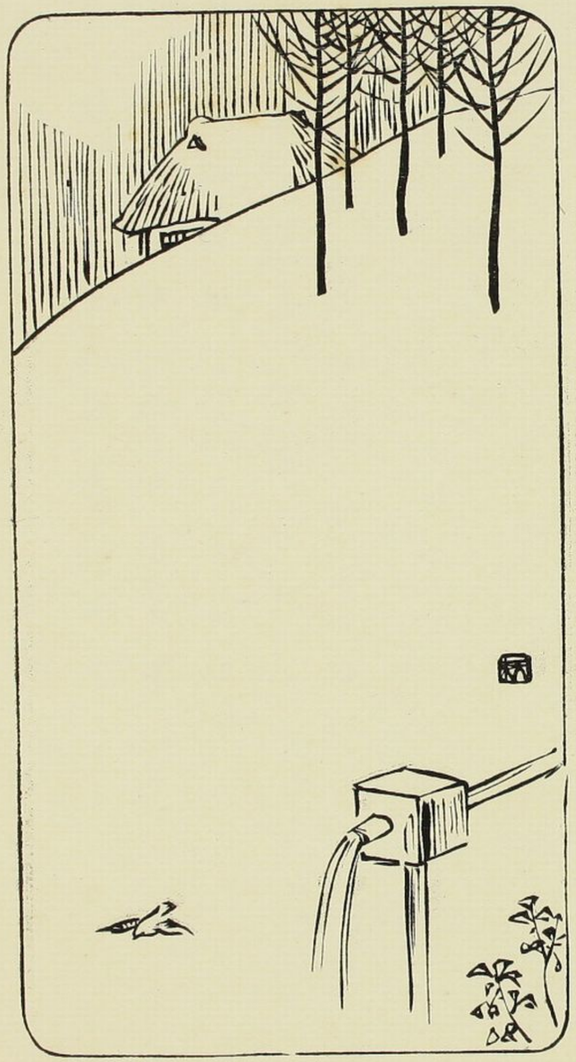
煩悶（もだね）さりてしづかに冥（ね）むる人のごと
くみよや入日の雲がくれゆく

鶯は春のめぐし兒花のむこそのひと
聲にあめつち動く

銀鈴の音しづやかにひゞかして白き
牝鹿の花ふくみ來る

夢さめて月かげさむき有明を小雨と
なりし山中のやど

竹葉舟に小さき思をうかべては流れ
もゆくか野の名なし川



軍神 廣瀬中佐

閉塞の功奏せずば
生きて再び歸らじな
わか友垣よいざさらば
わが艦隊よいざさらば
海にうまれて海に死す
心殘りのあるべしや

春とはいへどきさらぎの
御國はいまだ花さかず
暗雲漠々夜をこめて
潮風さむき黄海に
登舷禮に送らるゝ

第二閉塞決死隊

闇にきらめく砲臺は
黄金山と知られたり

義憤の血汐わく兵は
脾肉の嘆にたえざらん
仰ければ五更の星青く
ふなばたあらふ波白し

來れ今こそ旅順口
釜中の魚と知らざるか
かずかず列ぶ敵艦は
くらき潮の驚きて

流れて歸る滄溟に
ねむるよあはれ浪枕

嵐もすさべ風も吹け
死を顧みぬ日本男が

封鎖の手並いまみせん
港口めがけ眞一文字四
艘の汽船の漕きゆけば
あなや數條の電光り

紫電はやみに閃めきて
砲彈あだかも雨あられ
旋風瀾を捲きあげて
銀山くだけ珠ちれば
鮫鯨吼えて龍怒り
うづまき起る黑烟

千代につゞいて福井丸
我れと沈まん覺悟して

曹長杉野命をうけ
船艙ふかく下りしが
敵が放ちし水雷の
あはやこのとき破裂しぬ

歸航のいそぎとゝのひぬ
短艇に乘らぬ者やある
波に搖らめく舳に立ちて
中佐は部下を指揮せしが

兵曹長はかへらじと
舸のひとびとくちぐちに

杉野曹長いづこぞや
中佐は聲をうち絞り
あやふき汽船へみたびまで
小部屋〳〵をめぐりしも
傾ぶくふねにあら波や
もるゝ水泡のさやぎのみ

戰死か杉野いたましや
中佐涙をすゝりつゝ
今はとふねに移りしが
刹那敵彈破裂して
哀れ中佐は影もなく
虚空さながら血のいぶき

天にさけべと天いはず
浪に呼べども浪いはず

血汐にそみしゝむらを
この世の花のかたみにと
ふねに殘してゆきにたる
廣瀬中佐は神なりき

藻の花に何の笑まひかさら〳〵と

さゝ舟うけて流れゆく水

附記

松雨業終へて、校を去らんとするにあたり、その紀念として、二者が作を纂録して發刊せるもの即ち此のさゝ舟なり。今回の擧たる、もと匆卒に發して、竟に洗練改竄するに遑なく、意に合はざるものをも篇中に之を臚列せしは、今かへりみて、頗る忸怩に堪えざるなり。

然るに瀟洒たる小詩集として内容外觀ともに存外に整頓せしは、これ全く恩師齋藤鍋藏先生が編輯一切の懇篤なる幇助と畏友山形日報記者米倉雅雄君が出版のすべてを負擔せられて慘憺たる盡力ありしによら

ずむばあらず。清麗にして神秘的なる表紙畫、典雅にして詩趣多き卷中數葉の繪畫は、畫伯豊田天來先生が特に厚意を以てその丹青を凝らされしのなり。今これを記して三氏の好意を銘謝す。

明治乙巳　もつき、梅林風わたりて雪花ひるがへる
馬水河畔の學舍に於て

著者しるす

明治三十八年二月十日印刷
明治三十八年二月十五日發行

著作者　小關貞治
發行者　井上謙治
印刷者　米倉雅雄　山形市香澄町小鍜冶一番地
印刷所　玉谷安次郎　山形市七日町四百五十番地
山形活版社　山形市七日町四百五十番地

定價金貳拾五錢

不許複製

發賣所　山形市香澄町　最上川發行所

發賣所　山形市七日町　八文字屋書店
全町　牧野書店
山形市七日町　遠藤書店
山形市旅籠町　三澤書店

文學雜誌

最上川

『第四年第四號既刊』
毎月一回十五日發行
▲定價一部五錢半ヶ年廿八錢一ヶ年五十錢▲郵税一部五厘宛
▲郵券代用一割增

發行所　山形市香澄町　最上川發行所